キジハタ

氷見ではナメラまたはヨネズ、魚津ではアカラ、入善ではヤマドリと呼ばれる。本州沿岸、朝鮮半島および中国の沿岸岩礁域に生息する。茶褐色の魚体のほぼ全面にオレンジ色の斑点(はんてん)があり、水中で背鰭の下に大きな黒色斑が認められる。通常、35センチ前後で雌から雄へ性転換するが、飼育下では状況により変わりやすい。富山湾では7月下旬～8月が産卵期で、無色透明の分離浮性卵を産む（直径約1ミリ)。漁獲統計はなく（ハチメ類として一括)、資源の動態は不明である。主に定置網や刺網で漁獲され、釣り人にも人気がある。白身の魚で、刺身や塩焼きがうまい。小型魚は二束三文であるが、大型のものは値が高い。水産試験場では、1992年10月に氷見の小型定置網で漁獲された54尾（雌雄比は不明）を屋内水槽で養成したところ、翌年7月下旬から9月上旬にかけて約40日間産卵が続き、受精卵を得ることに成功した。孵化率は13～95パーセント（平均59パーセント）で、変動が大きかった。翌年以降も生産試験を続けているが、安定して仔魚が得られず、得られた仔魚も育っていない。瀬戸内海では種苗放流も行われているが、最北の生産県である富山県では、環境が厳しいのかもしれない。しかし、漁業者が資源増大に寄せる期待は大きく、今後の進展が強く望まれる。(渡辺)

コ チ

一般にマゴチ、新湊や四方ではヨゴチと呼ぶ。夏が旬で、刺身の薄造りはフグに匹敵するほどおいしい。あらい、コチめし、冬のチリ鍋(なべ)もうまい。

富山湾では6～10月に水揚げが多く、主に刺網で獲れる。1981～1997年までは漁獲量が少なく、17年間の合計でも15.2トン（平均0.9トン）しかならない。

日本の中部以南、紅海、太平洋、インド洋、オーストラリアなどに広く分布し、沿岸の砂泥域に生息する底魚(そこうお)である。秋には水深50メートルの深所に移動し、冬の間は餌をとらない。富山県沿岸における産卵期は7～9月で、多回産卵型である。

水産試験場では新たな栽培漁業対象魚種として生産試験に取り組んでいる。1996年には11尾の親魚から、2,630万粒の卵が採れた。この卵の一部を孵化させて飼育したところ、1年で15センチにまで成長した。仔魚の歩留まりはマダイやクロダイとほぼ同等であり、比較的飼育しやすいこともあって、将来の栽培漁業にも期待がかかる。(堀田)